

「幸せの約束」

エペソ人への手紙 6 : 1 - 4

June.15.2025

エペソ人への手紙 6 : 1 - 4 (パワポ)

Preface

生まれてすぐの赤ちゃんが、「お母さん嫌い、お父さん嫌い」と言っているのを見たことがありません。

お母さんの温もりや優しい眼差しが嫌いな子どもを見たことがありませんし、お父さんが守ってくれるという安心が嫌いな子どもも見たことがありません。

お父さんお母さんの愛情を求めるない、お父さんお母さんの愛情が嫌いという子どもにも出会ったことがありません。

人の子のみならず、動物まで含めてそうだと思いますが、赤い血の流れる生き物の中で、その子が、お母さんの温もりを拒絶し、お父さんの守りを拒否しながら、「お父さん嫌い、お母さん嫌い」と言っているのを見たことがあります。

子どもは皆、お母さんお父さんが、生まれながらに大好きです。

最初に憧れる人であり、身を避ける拠り所であり、その言葉一つ一つ、その表情やしぐさ一つ一つが、子どもの成長を左右する最も大切な要素だということを否定する人はいないと思います。

天地万物をお造りになられた三位一体なる神様は、「生めよ、増えよ、地を満たせ」と祝福されながら最初に人をお造りになった時、生まれて来る赤ん坊にとってお父さんお母さんは無二の大切な存在であり、最初の愛する人となるように、誰もがそう生まれて来るよう造って下さいました。

そこから想像される親と子の姿は、ただただひたすらに幸せで、ただひたすらに幸いな絵しか浮かんでこないようなものだったと思います。

Part One

ところが、人が神の前に罪を犯し罪人となってからというもの、この幸い・幸せが当たり前のものではなくなってしまいました。

最初の人アダムとエバが罪人となり、前回学びましたように二人の夫婦仲に大きな傷がついてしまい、喜びや楽しみばかりではない大変な痛みを伴う関係となりますと、その二人から生まれて来た最初の子どもカインとアベルも、父アダムや母エバと違わず不仲なところがあり、一瞬にして燃え上がるような怒りを抑えることが出来なかった兄カインが、弟アベルを殺してしまうという人類最初の殺人事件、家庭崩壊の姿を晒してしまう凄惨な家族の姿が、創世記4章に記されています。

当然、カインとアベルも、アダムとエバという両親の下生まれて来た時には、

お父さんお母さんが大好きで、最初に憧れる存在であり、拠り所であり、守ってくれる温もりある無二の存在だったと思います。

それなのに、肉体的にも精神的にも成長して行く中で、両親の不仲だったり、ケンカする姿だったり、不当だと八つ当たりだと思えるような怒りを自分たちにぶつけてきたり、ズルいところや弱いところや完璧でないところや不信感な姿だったりを目にするようになるにつれ、両親への幻滅や期待外れ感を覚えていったことでしょう。

現に、兄カインが弟アベルを殺めてしまうという大事件を起こしてしまう前に、両親アダムとエバのところに行って、その心の内を正直に吐露しながら相談したとか、また、とんでもない殺人事件を起こしてしまった後に、「どうすればいいのか」と両親のところに駆け込んで泣き付いたなんていう記録は、一切聖書には書かれていません。

たぶん、もしかすると、もう既にカインにとって、両親アダムとエバは、頼るに値しない存在として自分の中で認識されていたのかもしれません。

いずれにしろ、人類最初の夫と妻であるアダムとエバが神を見失ってしまった夫婦関係に陥ってしまったように、二人から生まれて来た子どもたちも罪人ゆえに、神を見失ってしまった不安定な親子関係を築かざるを得なくなってしまったということは、聖書の教えからしますと確かだと思います。

本来ならば当たり前だった、夫婦関係と親子関係の中心に神さまに居て頂く、神のご臨在とご介入を至って自然に当たり前のように意識出来るということが出来なくなってしまい、どんなに強く意識しても神を見失い、どんなに努力し努めても神の愛を忘れてしまうになり、とても完ぺきとは程遠い不完全な不安定な親子関係に人類全てが陥ってしまったことを、聖書は物語って下さいます。

聖書の教えばかりか、私たち自身の経験からも、親子関係や夫婦関係という敬虔からも十分に認めざるを得ない事実だと思います。

アダムとエバが罪人となって神の国エデンの園を追放されてからは、神を意識しようとも意識出来ないことが遙かに多く、キリストの贖いを表す神様がご用意下さった皮の衣を毎日着ていても、キリストから目を離すことばかりで、エデンの園にいた時のような幸いで完璧な夫婦関係でもなければ、完璧な親子関係になんか生きられない、大なり小なり必ずや痛みや傷の伴う家族関係になってしまったことは、確かな事実でしょう。

人が最初に覚える幸いは家族であり、家族を通して感じる覚える幸せこそ、人にとって最も基本的で大事な重要な神が定めて下さった幸いであり、幸せの源であり、始まりであったことを聖書は教えて下さっていますが、それと同時に、その幸せの形が壊れてしまった崩れてしまった、家族から不幸を、家族から不幸を覚えるようになってしまったという重大な悲しい事実も同時に教えてくれています。

聖書を始めからずっと読んでいく中で、何だか心が重いような気持ちになるのは、夫婦とか、親子とか、親戚とか、同僚とか、仲間とか、友人とかという近い関係にある人たち同士の生々しく争う姿が、包み隠さずそのまんま描かれていて、またそれが自分の姿とかぶるからなんだと思います。

そんな私たちに聖書は、「人類の不幸や不幸せの始まりは家族からである」ということを真っすぐに教えて下さいます。

だから、先程読みましたエペソ書6章でも、「主にあって自分の両親に従いなさい。これは正しいことなのです」と語り、「あなたの父と母を敬え。これは、あなたを幸せにする第一の戒めです」と語って下さっているんだと思います。

本来、父母を敬うことが、子を愛することが、人にとって最初の最も重要な幸せであり、至って自然な主なる神様にあっての幸いであったけれども、父母に従い、父母を敬うことが不自然なこととなってしまい、子を愛することが不自然なこととなってしまい、そのことこそが最も大事な人にとての幸せであり、幸せの原形であることを忘れている世界を私たちは生きているということなんだと思います。

Part Two

この事実について端的に語っている聖書箇所がいくつかありますので、見てみたいと思います。

まず、旧約聖書のミカ書です。

ミカ書7：6（パワポ）

神の言葉を守り、神の言葉に従って生きようとするのを忘れた捨てた世界の家族関係、親子関係を語っています。

「生まれて最初の愛する麗しい対象であったはずの親を敵とする」と語ります。

次はローマ書です。

ローマ人への手紙1：28－30（パワポ）

「親に逆らい」。

神を知ることに価値を認めないこの世界に蔓延っているのが、不義、淫行、貪欲、妬み、殺意、争い、陰口、驕り高ぶりなどですが、それと同等のしてはならない悪として私たちに蔓延っているのが、「親に逆らい」だと言います。

もう一箇所、第二テモテです。

テモテへの手紙第二3：1－5（パワポ）

「世も末だ」といつの時代にも言い言われ続けてきたように思いますが、本当の末、神の最後の審判という終わりの日が近い困難時代に現れる兆し、人々の様相として表れるのが、「自分だけを愛し、金銭を愛し、高ぶり、神を冒涜し、恩知らずで、人との和解を拒み、悪口や陰口をたたき、見かけの敬虔は上手い具合に装うけれども、中身の伴う敬虔・信仰がない」ということですが、それと同列に挙げられているのが、2節にある「両親に従わず」という人の姿です。

さらにもう一箇所、両親という範囲をもう少し目上の人へと広げ、また「父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません」というエペソ6：4の言葉まで含めて簡潔に語っている聖書箇所、申命記28章です。

申命記28：50（パワポ）

申命記28章は、人が神の御声に聞き従わず、神の命令を守り行おうとしないならば、自業自得として降りかかってくるのろいの項目が羅列されている、「そうなって欲しくない」という神様の悲痛な哀願が込められた聖書箇所ですが、そののろいの状況の一つが、「その国は横柄で、老人に敬意を払わず、幼いものをあわれます」です。

「小学校の子どもたちの声がうるさいから何とかしろ」とクレームを言ってしまうような社会、年の功を尊ぼうとしない世の中、唯一のまことの神を見失った人々に現れるしのうちの一つだと、この御言葉は教えて下さいます。

Part Three

ならば、「お前はどうなんだ」と、「私自身はどうなのか」ということが頭をもたげます。

私自身、今日の御言葉は、（まあ、毎週頭を抱えながら七転八倒しながら説教を準備させて頂いていますが）今日の御言葉は本当に悩ましく、何をどう語れば良いのか分からぬ、私自身全くもって恩知らずな不遜な子であり、愛の欠けた父であることを告白するしかありません。

普段の私の姿の全てを知っている妻や子どもたちを前にして語れることなんかないと思いながらも、語らざるを得ず、ふてぶてしくもこの場に立っていることが申し訳ないし、偽善そのものだと言うしかございません。

子として両親に出来たことなんか全くもってないという申し訣ない気持ちと、親として子どもたちにいい親であれていないという申し訣ない気持ちが先立つてしまうばかりです。

私の父と母も、当然ながら完璧な人ではありません。

正直嫌な思いもしたこともありますし、傷ついたことだってあります。

それでも、不器用ながら一生懸命に愛して下さり、守って下さり、どこまでも味方でいてくれた、私にとって無二の尊い父母です。

でも、先程の第二テモテにありました「自分だけを愛し」という気持ちが私

自身強すぎて、いつも親と接する時に出て来る感情は、感謝よりも、「あれもしてくれなかつた、これもしてくれなかつた」みたいな自分勝手な思いばかりが浮かんできてしまいます。

本当に身を粉にして、私という子を愛してくれた愛してくれている両親なのですが、いつも先立ってしまうのは、「まだ足りない、まだ足りない」という思いであるというのが、情けなくて仕方がありません。

妻も我が家の子どもたちも、そんな出来の悪い子としての私の姿をよく知っていますし、いつも「あんたが悪い、父ちゃんが悪い」と言われるのですが、中々直らない親に対する姿勢を告白するしかない、今日の御言葉の実践において落第点しか出ないことを認めるしかありません。

でも、一つ感謝なことは、それでも何とかして、「父母を敬いなさい」という神様の命令に生きたい、神様の命令を守ろうと努めたい、忘れないでいたいと思えていることです。

もう父は亡くなってしまったが、一人暮らしをしている高齢の母に、同じく一人暮らしをしている家の母に、私が愛そうとするほんの小さな心の思い、小さな小さな取るに足りない小さな言葉の実践に努めようとしていることを通して、幸せを、幸いを覚えてもらえた幸いだなあと、感謝だなあと思っています。

神様の言葉を諦めたくない、神さまが定めて下さった、人が感じ覚えることの出来る幸せの最も基本的なこと、重要なことを諦めたくない、イエス様が期待して下さっていることを諦めたくないという気持ちを持ち続けられていることは、感謝でしかありません。

主ゆえに、主にあるから、100%主なるイエス様のおかげでそう思えていたんだと、申し訳ない気持ちとともに感謝するばかりです。

今日の聖書箇所エペソ書6：1からの御言葉も、5：18の「ぶどう酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御靈に満たされなさい」という御言葉の続きであり、聖靈に満たされたならば努めるべき最も大事な実践項目であります。

御靈に満たされて、心が熱くなって、「はい終わり」ではなく、聖靈に満たされたならば、聖靈に満たされたことがどこにあらわれ、どこにあらわすのかという実践現場が、妻を愛し、夫を敬うということと同時に、「主にあって両親に従い、敬う」ということでもあるということです。

そして何よりも、聖靈の助けなしには、聖靈の満たしなしには、聖靈なる神様が私の内で働いて下さることなしには、主にあって、自分の両親に従い敬うという幸いに至ることは出来ないし、悩むこともないし、葛藤することも出来ないということなんだと思います。

では、「主にあって父母を敬う、父母に従うとはどういうことなのだろうか?」と考えます。

車を買って上げ、家を買って上げ、必要なものを買って上げ、面倒を見て上げて、それなりに言うことも聞いてあげて、出来るだけやれるだけ精一杯何かをしてあげるということも大事な、立派な、必要な親孝行かもしれませんが、それだけで、「主にあって」ということになるのだろうかと考えます。

そんなことを考えていますと、一つの思い出を思い出しました。

私が大学3年生の頃アメリカでクリスチャンになったばかりの時のことです。牧師の導くバイブルスタディーを通して聖霊なる神様に触れられ、イエス様を信じるようになって、それまで掛かっていたことにも気付かなかった目の前の霧のような雲のようなものがパッと晴れて、それまでと同じ世界なのに、昨日までの世界とは違って光輝いて見えるようになった劇的な体験をした時に、先ず最初に思い浮かんだのが、両親のことでした。

私のために身を削りながら、せっせと留学費用だと生活費を送って下さっていた東京足立区の風呂無しアパートで暮らしていた両親のことが真っ先に思い浮かびました。

今でも自分勝手な者ですが、大学3年生のイエス様を信じる前の私は、自分のことしか分からぬ、自分のことしか考えぬ、自分のことだけがかわいい、親の恩も分からぬ気付かない知らうともしない、今思いますと、薄情な奴だったと思いますが、そんな私に、日本でただただ私のことだけを思ってくれている父と母に手紙を書いて感謝を伝えなければと、それまで一度も考えたこともないような事が頭をよぎりました。

そして、「お父さんお母さんのこれまでの苦労は、イエス様に出会うことによって全部報われるから」ということを伝えたいと思いました。

当時暮らしていたホームステイ先の家から歩いて一番近いスーパーに行き、カリフォルニアサンディエゴの陽気な絵ハガキを数枚買って来ました。

色々とグダグダ書くのは恥ずかしいので、本当に短く、「お父さんお母さん、これまで色々とありがとうございました。主イエス様の名によってお二人を愛しています」みたいなことを書いて送った記憶があります。

父と母は、そんな訳の分からない、息子からの陽気な絵ハガキの手紙をいぶかしながらも喜んで下さり、大切にとっておいてくれていました。

それが最初の私にとっての、「主にあって父母を敬う」という小さな小さな行いだったように思います。

今思いますが、私にとっては最初の、聖霊なる神様が私の内に住まうようになって下さったからこそ出来た、聖霊様が私の内にいて下さるようになった証拠のような出来事だったと思います。

もちろん、その後も、親に反抗したり、悲しませたり、傷つけたりすることはありました、その度毎に、「あなたの父と母を敬いなさい」という御言葉が頭の中に響き、その幸せの約束の御言葉が私の頭をもたげるようになりなが

ら、この言葉の成就を祈るように導かれました。

そうして起こった何よりも感謝なことは、父が亡くなる6ヶ月前に、清野先生の司式と白石先生の立会いの下、主イエス様を告白しながら洗礼を受けて、天の御国へと召されて行ったことです。

母も洗礼を受け、今、教会生活をしていますし、家内の母も、私たち家族がアメリカに行っている間、ご自分の意志で洗礼を受けて、今楽しく教会生活をしていることが奇跡のように思えて仕方ありません。

正に、主にあって成された最高の親孝行かもしれないと勝手に思いながら、感謝しております。

Part Four

昨今、色んなメディアを通して、「毒親」とか「親ガチャ」なんていう言葉を目にしたり、耳にしたりするようになりました。

聖書の教えに従って考えるならば、毒親という言葉や存在も、親ガチャという言葉や存在も、私たち人間が神の言葉と神の命令を守り行おうとしない社会を作り上げてしまった結果なんだと思います。

神は愛なるお方ですから、言い換えるならば、愛を失った社会を作り上げてしまったということになるでしょう。

そういう世界の中で、決して揺るぐことのない愛による安心、愛されているという確信、絶対的拠り所となる愛を経験出来なくなってしまった結果、「毒親」なんて言われるような人になりたいと思う人なんか誰もいないはずなのに、いつのまにか、愛の渴望ゆえにそうなってしまう。

「毒親」とか、「親ガチャ」と表されてしまうような親や大人も、実のところ、ある意味被害者でもあり、神の愛という本当の愛の欠乏症に陥っていると言えるように思います。

だからと言って、「危害を加え、不当な苦しみを課そうとする親や大人の下を離れることなく、我慢してでも一緒にずっといなさい」というようなことを言いたいのではありません。

残念ながら、必要に応じて離れて距離を置き、場合によっては、一先ず関係を切らなければならないこともあると思います。

悲しいですが、それが現実でもあるでしょう。

それでも、ただ確実に一つ言えることは、どんな親の下に育ったとしても、自らが大人として親として、子どもに敬ってもらえる、従ってもらえるよう、自分という人を出発点にして親や大人になることは、誰にでも与えられているチャンスだということです。

そして、そのチャンスを最大限に生かすことの出来る必須条件が、「主にあって」、「キリストにあって」、「聖霊にあって」ということだと思います。

前回学びましたように、「妻たちよ。主に従うように夫に従いなさい」という御言葉は妻たちに語られている言葉ですが、この御言葉が実際にそうなるための責任は夫たちにあり、「夫たちよ。主が愛したように、自分の妻を自分のからだのように愛しなさい」という御言葉は夫たちに語られている言葉だけれども、この御言葉が実際に実践されるための責任は妻たちにあるように、「子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい、父母を敬いなさい」という言葉は、子どもたちに向けられた言葉ですが、この御言葉の責任は親たちにある、大人たちにあるということを覚えることも、この御言葉の重要な趣旨だと思います。

元々、「あなたの父と母を敬え」というオリジナル聖書箇所の出エジプト記20章にある十戒は、幼い子どもたちに語られている言葉ではなく、もう既に成人している大人たちに語られている言葉ですよね。

つまり、「あなたの父と母を敬え」という言葉の背後に隠されている大切なメッセージは、子が親を敬うということと全く同等に、今ここにいる私たち大人や親たちが、「従いたい、敬いたい」と思えるような親となり、大人となることを主にあって求めていくということなのだと思います。

親が子どもに無理強いし、子が親に責任を擦り付けることがこの御言葉の意図しているところではなく、まさに、「キリストを恐れて、互いに従い合う、互いに愛し合う」ということが、この御言葉の重要なポイントでもあると思います。

そしてそこに、「そうすれば、あなたは幸せになり、その土地であなたの日々は長く続く」という祝福が約束されているということだと思います。

Part Five

この後、応答の賛美で、「君は愛されるため生まれた」という賛美を歌いますが、この賛美は元々韓国で作られた賛美で、30年程前に夏休みを利用して日本に短期宣教に来るようになった韓国からの沢山の青年たちが、自分たちで日本語に訳して、遣わされて行った日本全国の教会で賛美したのが始まりでした。

ですので、始めのうちは、日本語訳バージョンがいくつかあって、数年経つて今の日本語訳に落ち着いたという経緯があります。

そして何よりも、「君は愛されるため生まれた」というこの賛美を神さまが大いに用い祝して下さって、一時期、大晦日の紅白歌合戦で皆で歌おうじゃないかというようなムーブメントまで起こったそうです。

でもやっぱり、キリスト教系の音楽だということでボツになってしまったのですが、まあびっくりですね。

この曲を作った方は、今は牧師となっておりますが、この方が青年の時、表向きは友人の誕生日のために作ったとされていますが、実は、この牧師先生のお父さんことを思って、お父さんを赦し、お父さんをイエス様の愛で愛した

いという気持ちを込めて、祈るように作った曲だとお証を聞いたことがあります。

この先生のお父様は、所謂、先程言いました「毒親」と言われてしまうような方だったそうです。

お酒におぼれ、暴力を振るうような父親としての責任を全うしようとしなかったお父様で、そんなお父さんのことを、この先生はずっと憎しみ続けてきました。

ところが、そんなお父さんのことを赦せない自分自身のことを神様から示されて、葛藤したそうです。

そして涙をもって祈る中で、この贊美が与えられ、この贊美をもってお父さんを赦し、祝福したいと思えるように導かれたということでした。

「そんなビハインドストーリーがあったのか」と衝撃でした。

笑顔いっぱいで、喜びいっぱい、誰かに向けて祝福を歌う幸せな贊美のイメージしかありませんでしたが、本当のところは、痛みの伴う、覚悟の染み込んだ、「主にあって」という信仰を全うしたい、一信仰者の神の前にあって真摯であろうとする姿が溶け込んだ曲などと知りました。

「父母を敬いなさい」という神の言葉に示され、神の言葉にすがり、神の言葉の幸せの約束を信じ、祈る思いで作った曲です。

このことを知ってからこの贊美を歌う時には、ただ喜びいっぱい笑顔いっぱいではなく、ちょっと深妙な思いになるようになりました。

Conclusion

人として生まれて来たからには、そのすべての人に、親がいます。

良い親、悪い親、良いところもあれば悪いところもあり、悪いところと思える方が良いところと思えることよりも多いかもしれない、または、悪いところよりも良いところの方が多い親かも知れない。

色んな親がいることは事実だと思いますが、みんな、主にあってその傷と痛みを癒やされて行く必要のある弱い一人間であり、それでも私たちの親なんだということを覚えながら、主に祈りつつ、子として取るべき行動を与えられるように祈っていきたいと思います。

出来るならば、「君は愛されるために生まれた」という贊美、祝福の言葉を抱きながら、両親のために祈っていきたいと願います。

そして、子どもたちに、「敬いたい、従いたい」と思われるような大人や親であるよう、遙りながら祈っていきたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 6 : 1